

2 挑み続ける「人財」の育成

- ・社会の中で自己を捉え、学び続けようとする「みつめる力」を育成
- ・直面する諸課題に、試行錯誤し、取り組み続けようとする「すすむ力」を育成

必要な アプローチ

- 人生100年時代を見据えた多様な職業観・勤労観の育成
- 困難に柔軟に対応できる社会的・職業的自立のための基盤となる能力の育成
- 相談機関や再挑戦・リカレント教育の機会の周知

例えば,こんなこと・・・

- ▶各学校段階に応じて地域課題を扱う機会を増やし、チャレンジしている過程を評価
- ▶発想を認め合い、尊重し合うことにより、自らの考えを表明する学習機会を充実
- ▶全ての教育活動において、取り組む過程を重視し、何度でも粘り強く挑戦することでレジリエンスを鍛え、目標を設定し、挑み続ける資質・能力を育成

幼児期

集団生活の中で、自己を発揮し、自信を持って行動できるよう、教師や他の幼児から必要とされる体験を伴う活動を実施

小学校

地域の身近な人々と協力し、活動する楽しさを体感させ、助け合う体験を重視し、発達段階に応じた自発的な活動への欲求の高まりなどを積極的に活用
高学年では、自己肯定感を育み、未来への夢や希望を持つことができる心や、異年齢集団の活動に進んで参加し、努力をしてやり遂げた達成感が味わえるよう重視

中学校

将来、社会でどのように役立つのか、といった学習の意義・目的をしっかりと理解させ、生活上の役割を果たす責任感や連帯感を育てることを意識した活動を重視

中学校・高等学校

就労後に直面する可能性がある労働問題等に関する教育等を充実し、相談機関・相談方法等についても周知

高等学校

各学科の特徴を生かし、生徒の実態等に応じ、社会との接続を意識し、多様な働き方を行っている職業人による出前講座や、大学生や大学院生、若手職業人によるキャリアガイダンスを積極的に実施

特別支援学校

幼児児童生徒の将来を見据えたキャリア教育を推進するとともに、高等部生徒の働きたい想いに応える就労支援の更なる充実

3 「自分」を認め・創る手立ての実践

- ・幼児期から高等学校段階までの体系的な振り返りによる「みつめる力」を育成
- ・「目標-実践-体験-省察-振り返り-目標再設定」による「えがく力」を育成

必要な アプローチ

- 生活等を振り返り、これからの生き方を見通す「キャリア・パスポート」の活用
- つながる「キャリア・パスポート」を踏まえたキャリア形成支援の充実

例えば、こんなこと・・・

- ▶ 児童生徒が、自分の強みを振り返り、近い将来と少し先の未来を考察できるよう「キャリア・パスポート」を活用
- ▶ 学年段階や学校段階での前後の接続を意識した「キャリア・パスポート」の活用方法を研究

幼児期

遊びを中心とした生活を通して体験を重ねるように、一人一人に応じて総合的に指導

小学校

各教科での学習が、日常生活や将来の生き方と関連していることに気付かせる機会を積極的に設け、自分の成長を感じ、学ぶ意欲につながる振り返りを実施
特に高学年では、自分の将来を描き、中学校生活に向けた意欲を醸成する小学校生活全体の振り返りを実施

小学校・中学校

市町村内あるいは中学校区内の小学校、中学校において連続した取組が可能となるよう教材等の工夫や活用方法を共有

中学校

生徒が長期的展望に立ち、主体的に進路選択できる力を育てられるよう、小学校から引き継いだ「キャリア・パスポート」をもとにキャリア形成支援（進路指導・キャリアカウンセリング）を充実

高等学校

小学校段階からの「キャリア・パスポート」を基に、生徒自身の将来や社会参画に対するこれまでの意識を把握し、キャリア形成支援（進路指導・キャリアカウンセリング）を充実

特別支援学校

個別の指導計画や個別の教育支援計画を活用し、卒業後の社会参加と自立を目指し、幼稚部から高等部まで切れ目のない教育の充実

幼・小・中・高の学校間連携（縦の連携）

教職員におけるキャリア教育の必要性の理解は高まっていますが、学校種により差が認められます。そのため、**接続を意識した取組**とその評価・検証の取組も必要です。

中学校の職場体験活動報告会で、事業所の方や進学先の高校生、校区の小学生を招き、発表や協議を行います。

（それぞれの学校段階の学びを接続させ、社会との接続をイメージさせる取組です。）

幼児の小学校体験や、中学生の高等学校体験入学、小学生に対する中学校体験等を行います。

（学校間の円滑な接続を意識した取組です。）

地域の学校から特別支援学校へ入学する幼児児童生徒に対しては、個別の指導計画等を活用し、**学習内容の引継ぎ**を行うことが必要です。

地域の学校と連携を図り、支援を要する幼児児童生徒に対して特別支援学校の専門性を生かした「相談活動」や「通級による指導」を行います。

（一人一人の社会参加や自立に必要な能力を高めさせる取組です。）



「縦の連携」と「横の連携」は、別々に機能しなければならないものではありません。

例えば、地元と連携し、地域課題の解決に向けて、中・高校生が集まって協議や発表等を実施した場合、この取組は、横の連携でもあるし、縦の連携でもあります。

（大切なのは、何を目標として、その取組を行っているのか、ということです。）

各学校が行っている取組について、どのような資質・能力を育成するために実施しているのか、また、発達段階等を踏まえ、接続する学校段階間で、どのように生徒の学びの深まりを促すものとなっているのかなど、活動することが目的となってしまうよう、整理が必要です。



学校・地域間連携（横の連携）

職場体験活動やインターンシップ、職業人による出前授業等により、社会との接続を意識した取組が充実してきていますが、様々な体験が一過性とならないよう、なお**一層充実**させる必要があります。

職場体験等では、受入れ事業所と趣旨の共有を図り、学校と事業所とが相互理解を進めます。

（育てたい資質・能力を共有する取組です。）

学校外で実施される体験的な活動についても、時期や内容の周知を行います。

（地域・地元企業等と連携する取組です。）

特別支援学校では、生徒一人一人の障がいの状態に応じた職業能力の向上、新たな職場や職域の開拓、企業への障がい者雇用に対する理解を推進する取組の**継続が必要**です。



引き続き、地域社会の中で活躍できる機会や場の拡充を進めます。

（一人一人の社会的・職業的自立を目指す取組です。）

キャリア・パスポートについて

このページは平成31年1月23日開催『キャリア・パスポート』導入に向けた調査協力者会議」資料を基に作成しています。

児童生徒が、小学校から高等学校までのキャリア教育に関わる諸活動について、特別活動の学級活動及びホームルーム活動を中心として、各教科等と往還し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりしながら、自身の変容や成長を自己評価できるよう工夫されたポートフォリオのこと。

(記述や自己評価の指導にあたっては、教師が対話的に関わり、児童生徒一人一人の目標修正などの改善を支援し、個性を伸ばす指導へとつなげながら、学校、家庭及び地域における学びを自己のキャリア形成に生かそうとする態度を養うよう努める必要があります。)

内容

- 1 児童生徒自らが記録し、学期、学年、入学から卒業までの学習を見通し、振り返るとともに、将来への展望を図ることができるものとする
- 2 学校生活全体及び家庭、地域における学びを含む内容とする
- 3 学年、校種を越えて持ち上げることができるものとする
- 4 大人(家族や教師、地域住民等)が対話的に関わることができるものとする
- 5 詳しい説明がなくても児童生徒が記述できるものとする
- 6 学級活動・ホームルーム活動で「キャリア・パスポート」を取り扱う場合にはその内容及び実施時間数にふさわしいものとする
- 7 内容のカスタマイズは協力者会議等の多様な意見を生かして行う

2019年4月からの1年間は試行期間となり、2020年4月からは、全ての小・中・高等学校で実施される予定です。【2019年1月現在】

校種を越えて持ち上げるためには、記録をコンパクトにまとめることなどがが必要です。

高等学校まで持ち上げるためには、冊子の形ではなく、学校・家庭・地域の多様な学びを綴ることができるファイルの形が有効です。

【この年で、自分が成長する上で影響を受けた出来事と理由】

「〇〇さんが言っていた『失敗がない日は、何もしない日』という言葉が心に残りました。つい、失敗をおそれて、チャレンジをしないことがあるけど、失敗してももう一度やってみたり、何か学べることがあると思いました。前向きな気持ちを持ってチャレンジしていきたいと思いました。そして、仕事はたくさんあり、自分が新しい仕事を創ってみるのも楽しそうだと思います。」



これらの様式例は、文部科学省『キャリア・パスポート』導入に向けた調査協力者会議」資料の中で示されており、今後、正式に通知される予定です。これらを参考に、徳島県ならではの「キャリア・パスポート」作成を進めて参ります。



様式例
(文部科学省HP)

